

報告

故 城崎 進 元理事長・院長追悼礼拝

2017年8月1日、城崎 進先生が召天されたという知らせが学院にもたらされた。先生は1990年10月に神戸女学院第11代院長に就任、翌年3月には理事長にも就任され、2002年3月まで(理事長は2001年10月まで)その職務にあたられた。在任中の1995年1月17日には、阪神淡路大震災が起こり、学院も甚大な被害を受けた。この震災とその後の復興という最も大変な時期に理事長・院長として皆の先頭に立って学院を支えてくださった。先生の訃報を受けて神戸女学院では2017年11月22日(水)15時30分から講堂において追悼礼拝を守った。

中野敬一チャブレン司式の下、先生を偲ぶ関係者、同窓生、旧・現教職員約100名が一堂に会した。オルガニスト・西山聡子氏の前奏を聴きながら黙禱を捧げ、故人愛唱讃美歌280番を唱和、斉藤言子学長が詩篇第23篇を朗読された。林 真理子中高部長は祈禱の中で、城崎先生が中高部の新年礼拝でその年の干支について書かれている聖書の箇所を取り上げて話をされたこと、常に笑顔で人の話に耳を傾ける姿勢であったこと、また student first という、当たり前のことではあるが、今まではっきりと言葉にされてこなかったことを表明されたこと、そして今もこの方針が受け継がれていることを紹介された。このあと、城崎先生のお嬢様で本学卒業生でもある伊藤愛子氏(87大E91)と皆本礼子氏(104大F108、現めぐみ会会長)お二人による讃美歌284番(1954年度版)二重唱があった。中野先生による聖書朗読(ヨハネによる福音書第6章12-13節)に続いて、飯謙チャブレンが式辞の中で、生前の城崎先生の誠実さを表わすエピソードに続いて、学者としての先生について述懐された。

先生は7月16日に芦屋山手教会で説教をする予定で原稿を準備されていたが、当日はすでに入院されていたので、林牧師に託された。これが先生の最後の説

教となった。旧約学の専門家であった先生は学会では常に最前列に座って質問をされた。当時の研究最先端はオリジナル以外を切り捨てるという方向にあったが、先生は編集史という視点を導入、後から加えられたものも切り捨てず、加えられた意味を考えられた。先生は向かい合う人に誠実に接し、その人の良いところを引き出し、一人一人に親切に丁寧に道筋を示してくださった。先生が神戸女学院院長であった時期は、阪神淡路大震災という未曾有の災害を経験したときであった。岡田山を守るために奮闘された先生は、学校というものが「公の器」であるという意識を持とうと言われ、「伝統は継承するものではない。作るものだよ。」とおっしゃったという。

故人愛唱讃美歌532番に続いて追悼の言葉があった。

城崎先生の跡を継いで理事長・第12代院長に就任した松澤員子先生が先生との思い出を語られた。実はお目にかかって言葉を交わしたのは在任中、それ程多くなかった。ちょうど震災の年に奉職し、辞令は先生からもらった記憶がない。初対面は大学院人間科学科申請の説明時で、柔和な笑顔で話を聴いて下さりほっとしたことを覚えている。2回目は学長就任の時だった。その後、院長として学院に戻ってきたが、建学の精神を全うすることは難しい。様々な人間問題にも直面した。人の話を聴くことの大切さを学んだ。

次に当時院長秘書として先生の間近で接していた樽本裕見子学長室課長が先生の人柄を示すエピソードを語られた。震災という大変な時期に student first、建学の精神を生きると宣言された先生はとても温和な方で、お昼にはよくサンドイッチを召し上がっておられた。時々ご自身で買いに行かれると、持って帰られたのはカップヌードル。家では食べさせてもらえないから、と言ってスープまで飲み干しておられた姿が微笑ましい。「仕事は60%でいい」と言われたことがあった。当時はよく理解していなかったが、今では「余裕が必要だよ」ということなのだとわかる。

この後一同で讃美歌434番(故人愛唱歌)をうたって、そのあと中野先生の祝禱があった。遺族を代表して奥様・城崎吟子氏が、最後はご自宅で迎えられたこと、先生は事の本質を理解する方で、頑固だけれどユーモアのある性格であっ

たことなどを話し、挨拶された。両脇にはお嬢様お二人が立っておられた。最後に森 孝一理事長・院長が神戸女学院を代表して挨拶、一人一人が祭壇の前に献花して礼拝は終了した。

この後、会場を社交館 2 階ラウンジに移して、茶話会が持たれた。

追悼の言葉を述べられた方々が皆口にしていたのは、城崎先生が温和で笑顔をもって人の話に耳を傾ける姿。先生が書かれた文章にも「辛そうな顔を見せず、いつもニコニコしている院長でありたいと思っています。」(1997年 7 月発行『めぐみ』第86号)とあったことを思い出す。先生の天上でのご平安をお祈り申し上げます。

最後に学院関係発行物に掲載された先生の文章の一覧をあげておく。

『学報』(神戸女学院学報委員会、年 3 回発行)

- 第99号(1990年12月20日)pp.1-2 「院長就任の辞」
- 第101号(1991年 7 月10日)pp.1-2 「理事長就任の辞」
- 第103号(1992年 3 月15日)pp.6-7 「米国出張旅行の報告」
- 第105号(1992年12月16日)pp.1-2 「プロの僕(しもべ)」
- 第108号(1993年12月16日)pp.1-2 「学院の総意で」
- 第111号(1994年12月16日)pp.1-2 「院長再任の辞」
- 第112号(1995年 4 月28日)pp.1-2 「震災にうち克とう」
- 第115号(1996年 3 月15日)pp.1-2 「こんなに愛されている学院」
- 第119号(1997年 7 月 8 日)pp.2-3 「感謝」
- 第123号(1998年12月17日)pp.1-2 「愛神愛隣—クリスマスに想う—」
- 第126号(1999年12月17日)pp.1-2 「『神のかたち』としての人間—聖書の人間理解—」
- 第129号(2000年12月19日)pp.1-2 「神戸女学院創立125周年記念式典式辞」
p.3 「創立125周年記念神戸女学院教職員礼拝 奨励 『仕える』(要旨)」
- 第134号(2002年 3 月18日)p.7 「有難うございました」

震災関連発行物

「神戸女学院学内広報」(総務課、1995年 1 月30日～ 3 月 6 日計 8 号発行)

第 1 号(1995年 1 月30日)巻頭 「忍耐と寛容を」

「震災復興事業 1997」(神戸女学院、1997年6月発行)巻頭 「感謝」

『めぐみ』(神戸女学院めぐみ会、年1回発行)

第80号(1991年7月)p.4 「神戸女学院院長に就任して 扉を閉ざし 扉を開く神様」

第81号(1992年12月)p.8 「三者の共同の業」

第82号(1993年7月)pp.4-5 「院長からの報告と訴え」

第83号(1994年7月)pp.4-5 「キリスト教学校に将来はあるのか」

第84号(1995年5月)pp.4-5 「この時のためにこそ」

第85号(1996年7月)pp.4-5 「学院震災復興の歩み」

第86号(1997年7月)pp.4-5 「院長って何してるの」

第87号(1998年7月)pp.4-5 「ご報告と感謝」

第88号(1999年7月)p.4 「凡てのこと相働きて」

第89号(2000年7月)p.4 「卒業生の親として」

第90号(2001年7月)p.4 「立学の精神を生きよう」

第91号(2002年5月)p.7 「愛神愛隣」

第102号(2013年5月)p.14 「懐しいのは院長室より『めぐみ会館』」

『学院史料』(神戸女学院史料室、年1回発行)

第9号(1991年3月)pp.1-3 「非歴史家の辯」

(佐伯裕加恵)